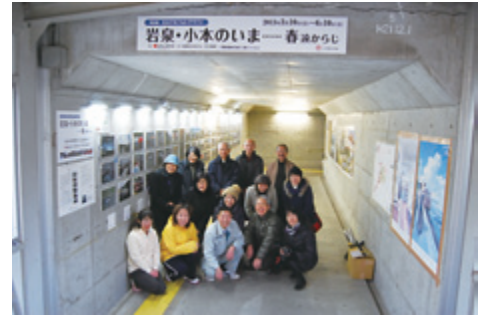




■主な内容

- ・第 57 回海外交流の会の報告『モンゴルの建築・都市最新情報』
- ・第 58 回海外交流の会の報告『モンゴルのコスモス・ゲルと大地とモンゴル人』
- ・特集：「住みつなぎ一住まいを地域に開く」
 - 在林館（ありりんかん）の記
 - 自宅の庭を「まちの縁側」に
 - 会員の本：『住みつなぎのススメ』
 - 高齢社会をともに住む・地域に住む
- ・被災地通信（5）
- ・岩泉町の復興記録集が出来ました



小本駅構内写真展Ⅱ
の展示作業を終えて
橋本 嵩氏撮影

第 57 回海外交流の会の報告 『モンゴルの建築・都市最新情報』をお聞きして

正宗 量子

57th Intercultural Lecture : Recent Mongolian Architecture and Urbanism by Prof. Hiroshi Yatsuo MASAMUNE kazuko



講師：八尾 廣先生

1972 年に日本とモンゴルが国交樹立してから昨年は丁度 40 周年。昨年末 12 月 22 日、東大駒場のファカルティ・ハウスで開催された第 57 回海外交流の会は、近年モンゴルの建築を視察された八尾廣先生から『最近のモンゴル建築事情』について大変有意義な講演をいただいた。

■モンゴルの変遷とウランバートルの変貌

モンゴルの国勢データ、地勢や気象の基本情報に始まり歴史に及んだ。12、3 世紀チンギスハーンが世界を制覇していた頃から隣国ソ連や中国からモンゴル人民共和国（社会主義国）が成立したのは 1924 年のことである。19 世紀迄は純粋な宗教都市だったが、スターリン時代の修道院破壊、僧侶の処刑など厳しい弾圧にあい複雑な歴史を紡いだモンゴルは 1992 年社会主義を捨て、新憲法を制定しモンゴル国と改称し近代史はすっかり塗り替えられた。経済基盤である羊毛繊維産業に加え、近年レアアース等豊富な地下鉱物資源に恵まれ、急速な経済発展を遂げ変貌のさ中にある。首都ウランバートルを中心に近代国家が生まれたのは 1945 年。近代的都市計画で整備されたスフバートル広場を中心に、モンゴル国立大学、国立中央劇場、中央官庁や病院、劇場やホテルが建築され整備された。日本の JICA の都市計画支援、中国、韓国の資本も流れさまざまなデザインの高層ビルが林立しているという。

■草原生活から都市生活への夢を求めて

モンゴル人の強靱なエネルギーの根底に潜む精神は、多分、厳しい寒さ、草原と沙漠の中に暮らす大地の自然に育まれたものに違いない。1 人に 700 m²の土地を与えられ、例えば 6 人家族（若夫婦と子供 2 人、老夫婦）であれば 4200 m²の土地に住むことができる。俯瞰すると土地ごとに 1.6 m～2.2 m ほどの木柵で周囲を囲み、スライドで紹介されたある家庭では、老夫婦は住み慣れた円形のゲルを建て、若夫婦は近代的な住宅に住む混在配置で、トイレは別棟小屋。これが続く都市は異様な姿の集住と言える。近代的と言っても壁厚 40cm、断熱材無しのペチカ、裏側にストーブ。燃料は石炭が主流なので排気ガス問題は尽きない。若夫婦なのにどうしてもゲル住まいの家具配置になってしまい、老夫婦は、それでも生活環境の変化を求めているのだが、やはりゲル住まいの型になってしまうという。まさにモンゴルの住環境は多種多様な混沌の中にあるようだ。モンゴルの抱える課題として、貧富の差、高校や大学における住教育の必要性、中国、韓国からの輸入による建材不足の解消、石炭の排ガス問題などがあげられ、かつ、いまだに平原に放牧された羊の群れを追う遊牧生活が続いている。だが、国民の視座は遊牧から半定住に移行し、さらに一直線で定住近代都市へと向かっているように感じられた。



上段：ウランバートル北部の谷筋に延々と拡大するゲル地区
中段：ゲルと定住用住居の混在する多世帯居住の様子
下段：定住用住居でも家族用寝室はゲル式の家具レイアウト

(写真：八尾 廣)

第 17 回 UIFA 世界大会ウランバートル（モンゴル）

テーマ “Women Architects in the Fight Against Global Warming”

会期：2013 年 9 月 1 日（日）～7 日（土）

参加登録が始まっています。登録用紙（Registration Form）を UIFA 本部のホームページよりダウンロードし、書込で郵送申込みするのが確実と思われます。同時に UIFA JAPON 事務局にも送ってください。事務局でまとめて申込はしませんので、ホテル・飛行機などの予約も各自で行ってください。（参加人数によってはツアーを組むことも考えられますので、今後のお知らせにも注意してください）



講師：金岡 秀郎先生

モンゴル大会に向けての研修として、昨年 12 月に行われた八尾廣先生の講演会に続き、第 2 弾が 3 月 2 日（土）、AGC スタジオ会議室にて開催された。講師の国際教養大学特任教授の金岡秀郎先生は、モンゴル学・仏教学が専門で、とくにモンゴル語の翻訳文献成立史を研究されている。1983 年に初めてモンゴルを訪れて以来、すでに 30 回以上行かれていた先生のお話は、モンゴリアといわれるモンゴル人の土地について始まり、12 世紀のチンギス・ハーンによるモンゴル帝国建国から中国・ソビエト支配下の歴史、自然、牧畜生活、モンゴル人の思考、現在のモンゴルの状況等、ジョークを交えながら多岐にわたり熱く語られ、私は大変興味深くまた楽しく拝聴した。

■ゲル—大宇宙から文節する小宇宙

モンゴルと言えば、どこまでも続く草原、点在するゲル、羊や馬の群れをイメージする。しかし国土の 8 割を占める大草原地帯と共に、北部の針葉樹に覆われたタイガ地帯、南部のゴビ沙漠の乾燥地帯、水と樹木がある肥沃なハンガイの高原地帯もある。そしてこの環境に適応しながら、モンゴルの遊牧民は分解・組立てが可能な移動式住居のゲルに暮らしてきた。ゲルは、木造の骨組み、フェルト製の覆いと固定する紐で構成されている。ハナと呼ばれる格子の壁材が 8 枚という、モンゴル人にはそのゲルの大きさがわかるらしい。日本人が 8 畳と言われ空間が認識できるのと同じだ。激しい乾燥、そして冬には -40℃にもなる厳寒の地という自然環境の中、フェルトに

覆われたゲルは、外部の大宇宙から文節する小宇宙であるという。外の広大な自然から、ゲルの敷居をまたぎ人は出入りするとともに、天井中央のトーンには煙出し穴があり、これは外界との出入り口で魂が出入りすると言われる。ゲルはその建て方に始まり、ゲル内の生活を通して様々な秩序や社会規範が維持伝承される場でもある。

大会の際は、民主化運動以降急速な変化を続けている首都ウランバートルと、自然の中で伝統的な営みが続くモンゴルが体験できることを期待している。また金岡先生の著書「モンゴルを知るための 65 章」はもちろんのこと、講演中紹介されたモンゴルでの抑留生活を描いた胡桃沢耕史の「黒パン俘虜記」や、内モンゴルにおける文化大革命が書かれた「墓標なき草原」も合わせて読みたいと思う。



「ハンガイ地方の肥沃な牧草地」写真：金岡 秀郎

特集：住みつなぎ—住まいを地域に開く

Special Feature: Opening an Old House to the Community

戦後のベビーブームから 60 余年、日本は世界有数の高齢化社会になった。核家族・個人主義が徹底して、地域社会は希薄だ。しかし、その閉塞感を破るように、住まいを地域に開く試みがあちこちでなされている。長い老年期をより楽しく支え合って生きるための場。そんな「人のつながり」を形にした二つの事例を紹介する。（田中厚子）

会員の本：『住みつなぎのススメ』 - 高齢社会をともに住む・地域に住む - Member's book: Encouraging Communal Living and Preservation of Houses

この著作は、UIFA の会員である在塚さんを中心とする住総研高齢期居住委員会の研究活動報告です。タイトルにあるように、住まい空間のあり方やその地域への解放や活動の仕方に様々な工夫を加えることで、家族の枠を超えた広い人間関係や地域とのつながりを作り出し、行政による高齢期サービスを補う豊かな高齢期の暮らしを実現している事例を紹介しています。そのやり方や考え方が、自らの住まいをまちに開く、まちにもう一つの住まいを作る、ともに住む住まいを作ると言う三つの方法に分類され、具体的に丁寧に説かれています。わかりやすい上に温かいまなざしを感じさせる文章で、深く考えさせられつつもあつという間に読み終えることができました。

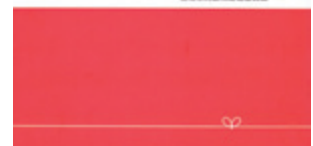
読後最初に感じたのは、そこには人間の生き方とその人の社会や他者との関係、そして住まいの形が強く結びついている有様が明確に示されているという事です。取り上げられている人々はいずれも自分の人生に対する信念を持ち、住まい空間や地域社会のあり方にも自覚的で、しかもそれを自然体で実行しています。誰もが直面する

問題を、こんなに豊かに解決する人々がおいでだと言う事に、その方法もさりながら皆さんの心のありように感動し、今後の社会の指針として可能性を感じました。また、本書には一貫して住まいの社会的機能が失われた事への危機感と、高齢社会を豊かにするには個々の生き方を見直すしかないと言う問題意識があります。昨今はシェアハウスが若い人々にはやっているというニュースもありますが、是非多くの次世代にも紹介して、これからの地域と住まいのあり方を社会全体で考え直す手掛かりにすべきだと思いました。

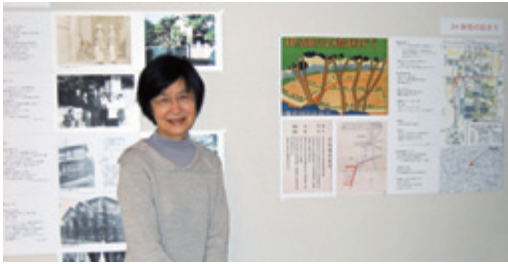
（黒石いずみ）



住総研高齢期居住委員会 編著
委員長 在塚 礼子



住総研高齢期居住委員会 編著
委員長 在塚 礼子



在林館展示「34番地の始まり」のままで

2012年10月18日、オープンの日は雨模様。これではどなたも来られまい、と思ってほどなく、門から玄関へと進む3つの傘が見えた。隣家の一族の女性陣だった。その後も近隣の2組のご夫婦が訪れてくださった。感謝の気持ちとともに、在林館が始まった。

■なぜ、住まいをまちに開くのか

在林館とは、母の住まいを地域に開いたスペースである。

日本の住まいの近代化は「家族本位」をめざした。とくに第2次大戦後は、客向きの玄関や続き間座敷は否定すべきものとされ、住まいの地域生活の場としての役割は乏しくなり、地域生活や近隣関係の希薄化と連動した。たとえば数年おきの高齢者生活の国際比較調査では、日本の高齢者の近隣関係や地域活動の不活発さは突出している。このような状況は子どもたちにとっても親たちにとっても、不幸なことに違いない。

かつての西ドイツの高齢者住宅基準には「必ず居間の窓をひとつ道に向けること」とあって感心した。社会参加や避難のための窓である。また、「昔、会津の家の前には「休み石」と呼ぶ、ひとやすみできる石があったが、歳をとった今、その意味がわかった」という新聞投書欄の一文も心に残った。私もいつか住まいをまちに開こう、と思うようになっていた。

■在林館を開くまで

母が息を引きとったのは、2011年9月。そのへやで近親、近隣者のみのお別れ会を開いた。そこを居心地がいいという人

がいた。壊す気にはならないし、ここを開こう、と思うのに時間はかからなかった。すでに、壁には母の絵、妹の絵、私の書がかかっていた。ギャラリーのような場所に、と決めるのにも時間はかからなかった。

そのとき私は、高齢社会の住まいやまちをテーマに、本を書いている最中だった。そこでも、人と人、人とまちをつなぐことを課題とし、「住まいを開く」事例をとりあげていた。先行例は参考になった。自分は自分らしく開くことだ。

まちをよくするためには自分のまちに愛着と誇りを持つこと、そのために「まちを語り継ぐ」こと。これは、私のもうひとつのテーマである。ギャラリーをそういう場として活用していこう。

■開くとつながる

最初の企画展は「羽根木の日々」。母が最晩年に描いた絵を中心に、母の過ごしたこの小さな住宅地の古い写真を展示することにした。古い写真は、在林館の今後の企画の布石であった。来られた方に、写真の提供などをお願いした。

2回目の企画展は80年前に生まれたこの住宅地の人と住まいとまちなみの変化を写真や図で伝える「34番地は80歳」。すでに転出した方も来館してくださり、展示物は少しずつ増え、エピソードが集積し、隣町の会合に話しに来てと声がかかる。

この企画展は、「地域共生のいえ」登録を記念するものでもあった。

■地域共生のいえ

70～80年代、世田谷区はまちづくりセンターによる先進的活動で知られた。それを受け継ぐ（財）世田谷トラストまちづくりでは、2004年から、住まいを開こうという人を支援する「地域共生のいえ」の試行を始めていた。大いに賛同した私は、これを支援し、いつか自分も参加することを決めていた。在林館は、地域共生のいえNO.12となった。

その仲間とも連携しながら、地域の「休み石」として、まちの記憶の継承の基地として、在林館を育てていきたい。

自宅の庭を「まちの縁側」に
A Residential Garden as Communal Patio

稲垣弘子
INAGAKI Hiroko

2年程前から自宅庭で、高齢者に近くで気楽に集まる場の提供を始めました。狭い庭ですが、幸いバーベキュー用の流し台とテーブルセットがあります。近隣の3名が中心に、近くの高齢者に声掛けしお茶を飲みながらのおしゃべりです。

■「まちの縁側」の由来

30数年前の転居時は、子供の遊び声が飛び交うところでしたが静かな街になりました。一人暮らしの高齢者を訊ねると、「家に居ると一日中誰とも話をしない」とか、「言葉を忘れそう」との声が聞かれます。周囲を見渡すと皆門が閉まり気楽に尋ねる雰囲気ではありません。

現代社会は個人生活を重視し、近隣住民との関わりを煩わしいと遠ざけてきた経緯があり、また防犯上門を閉じ確認後招き入れるという建物の構造的変化も影響し、ますます気軽なコミュニケーションが取りにくくなっています。高齢者向けサークルやイベント活動も、公共施設利用が多く健常者には近い場所でも体力の低下した高齢者には負担です。身近なところでの交流は難しいのでしょうか。

かつてどこにでもあった縁側は内と外との中間にある空間で、気軽な出会いと交流のある心地よい場所でした。挨拶をするだけでも、時にはお茶を飲みながら他愛のない話をしたり、手づくり技術を伝授したり・・・。

仲間がいる安心感から暮らしに張りが出て、「生きる力」を喚起します。日々の暮らしの中で、世代や性別、居住歴などに関わりなく一緒に時間や空間を共有し合える、まさに縁側のようにオープンな場所と社会的仕組みが必要とされているのではないのでしょうか。これが「まちの縁側」の由来です。

■「まちの縁側」は毎月第4木曜日の10:00～12:00。

男性を含め10名程でスタート。何か手仕事をしようと、端布を持ち寄り「ふくろうのストラップ」作りを開始。針仕事は無理と綿を入れる人、型紙を切る人、目をボンドで付ける人など、自分のペースにあった役割を見つけ楽しんでいきます。40個程できたところで、近くの福祉施設に寄付。デイサービスでお誕生日の方に順次プレゼントすると喜ばれています。現在はティッシュカバーを制作中。最初は、針仕事はもう出来ないと見ていた人も、針を持ち、押し入れの奥から小型アイロンや端布を探して持ってくるなど積極的に参加するようになりました。

材料費の負担を考えボランティア助成に申請。昨年9月から助成金を受けての活動です。近隣の区役所からも身近なコミュニティを作る参考にしたいと問い合わせがありました。

真夏はテントを張り、雨降りは休みにと高齢者に負担のかからないよう、急がず、あせらず、のんびりした活動です。



テントで日差しをよけ、お茶を飲みながら手仕事 右：筆者

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

URL: http://uifa-japon.com

発行 2013年4月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

被災地通信 (5)

東日本大震災3年目を迎えます。 岩井 紘子
Report from the Disaster (5): Visit to the damaged area
after three years IWAI Hiroko

本当はもっと踏み込んだ相談に乗ってあげたかったのに、若干消化不良気味に終わった福島県新地での住宅相談会。でもこのような実務的世界での支援が出来た事は、とても意義深く更なる機会を得たいものです。そして被災地は震災後3年目を迎えます。前向きな生き方にトライ出来るか否かの分水嶺に来ております。早く家が欲しい、なのに建設された公営住宅への募集に応募者数が満たない現実もあります。被災地の困惑はこれからです。

岩泉フォトグラファー展オープニングと同時の小本駅メモリアルイベント、やり切れない昨年の空気とは格段の違い、軽くなった。一見小綺麗に見える宮古、釜石の町並みだが山田町、大槌町はまだまだ残酷な景色。残骸そのものである大槌市役所近辺、辛うじて残る基礎のみのあっちこちの居宅跡には、墓所でもあるまいに花が添えてある。大槌を少し南下すると美しい碁石海岸がある、これがかの絶景陸中三陸海岸なのだ。でもそこですら天井近く水を被ったという食堂、別客1組のみ。広田半島山頂に建つ陸前高田気仙大工左官「伝承館」、庭先にある神戸から来たという希望の灯り、そしてレプリカになって戻ってきた陸前高田奇跡の一本松に手を合わせ、閑散とし、ジッと辛抱生活を送っているような仮設住宅群をあっちこち目にしながらの今年の3月11日メモリアルツアーでした。



左上: 2013年3月11日
小本駅メモリアルイベント
左下: 大槌市役所
右: 陸前高田奇跡の一本松レプリカで
戻る

岩泉町の復興記録集ができました。 北本 美江子
Report on Iwaizumi KITAMOTO Mieko

昨年夏前から、岩泉町の復興記録集作成の委託をUIFA JAPONが手伝うという形で、委員会のメンバー7人がインタビューや文章のまとめ、だれでもフォトグラファの写真整理などに関わってきた。インタビューは計5回ほど岩泉まで足を運び、話を伺った地元の方は80人を超える。だれでもフォトグラファやどこでもカフェと同じ時期に行き、合間にインタビューしたこともあったが、昨年末には残ってしまった学校の先生に、電話インタビューまでした。



『明日の岩泉へ』
—東日本大震災 岩泉町復興の記録 その1—
平成25年3月11日岩泉町発行
協力: UIFA JAPON

実際に被災者や地元の方に話を伺うと、「被災地」「復興計画」と型通りに考えていたことに血が通って、その地域について現実感、親近感が増してくる。地域というのは、何とも多くの情報を持っているものだ実感する。被災自治体ではいろいろ「記録」を作成しているが、なるべく行政文書らしくなく、一般住民の視点が出るように工夫したつもりだ。本のサイズもA5版で、大判が多い記録集の中では異色だろう。

自治体との委託契約は生活構造研究所(株)だったので、年明けから最後の発言者の確認作業や行政との調整は大変だったように聞く。自治体の発行物となるので、それなりのチェックが必要となり、どうしても当たり障りのない文章への変更要求が来て、手を入れる部分が多かったようだ。そこに至るまで、何冊もの仮版を作った上でのことなので、とても心のこもった記録集になったと思う。苦労したこの記録集が、地元の人々にとって、だれでもフォトグラファ活動を通じた写真などの表現手段で自ら発信する契機となればいいと願っている。

役員会報告

第9回2013年1月24日(木)第57回海外交流の会報告 第58回海外交流の会(モンゴルについて)の準備へ 神奈川県立女性センターでパイオニア展開催総会20周年準備へ だれでもフォトグラファー展をIAWA開催準備 福島県新地町住宅相談状況報告 AS輪組NPO法人になる 1/25ニューズレター93号発行/第10回2月27日(水)第58回海外交流の会準備 パイオニア展越谷にて開催 岩泉町にてだれでもフォトグラファー展開催準備 この後写真はヴァージニア工科大学へ どこでもカフェ岩泉準備 総会5月25日(土)開催決定 モンゴル世界大会での発表者選定 モンゴル大会参加登録について/第11回3月12日(火)第58回海外交流の会報告 総会準備:名簿と活動報告の書式など確認 20周年ド・ラ・トゥール会長招聘と東北旅行準備 岩泉町復興記録本の完成 東日本大震災3年目のメモリアルイベントへの参加報告

編集後記

介護保険証の届く日來たり百花魁(在塚) / 開花時期等の変化で例年の記憶があてにならなくなっています。今年もしっかり植物の顔をみて作業しないと(飯田) / 今年も花見をせずに春が過ぎてゆきます(薄井) / 4月の花々には、新たな始まりへの希望とともに残された時間の短さへの哀しみがある(黒石) / 4月には復興住宅に移ると笑顔が言う、言葉も掛けられなかったあの頃を思う(須永) / 25年ぶりに自宅を改修中。実験はひかえました(田中) / ボタンもバラもブルーベリーも藤も咲いた。復興の花はいつ咲くか! 老いとたたかひのようにまどろこしい(渡辺) / 心騒ぐ花の季節にめぐりくるときを思いながら仲間を自分確かめあい(井出)